

エピソード4 「やっぱり俺は、天才だ」

健太、38歳男性。大学教官。その妻M穂が、疲れ果てた表情でクリニックを訪れた。

夫の健太はM穂の3つ年上で、大学院時代の先輩だった。二人は新入生歓迎会で出会い、一目で恋に落ちた。健太は明るく朗らかで、M穂と一緒にいると楽しかった。よく教授の物真似をして笑わせたり、休みの日には健太の車で岩手や青森の奥地までドライブに出掛けた。わずか1ヶ月ほどの熱烈な恋愛期間を経て、二人は結婚した。

ところが結婚して5年ほど経つと、M穂は夫の気分には波があることに気がついた。陽気でおしゃべりな時期と、無口で塞ぎこんでしまう時期があるのだ。元気なときは夜通しで仕事を続けたり、学生のころのようにM穂を遠方までドライブに連れだしてくれた。ところがしばらくすると、健太は次第に怒りっぽくなることに、M穂は気付いた。

半年ほど経つと、今度は逆に元気がなくなってしまう時期が来た。動作は緩慢で、口調も重苦しくなった。朝方はなかなかベッドから起きあがれず、「体が鉛のように重い」と言って大学を休むこともあった。M穂は健太の体を心配して、いくつか病院を受診したが、どこの病院でも「異常はない」と言われた。ただ最近1年ほどは、そうした気分のムラがないことに、M穂は安堵していた。

今から遡ること、1ヶ月ほど前のことだった。「教授から『論文の数が少ない』と嫌味をいわれた」と、健太がぼやいた。健太は教官として採用されたばかりで、「大学をクビになるかも知れない」と強い危機感に襲われた。それからというもの、徹夜で論文を書く日々が続いた。執筆がはかどってきたのか、妙に機嫌がよくなる時期があった。数週間前のこと、突然、健太が茶髪に染めて帰宅した。M穂が唖然とした顔で出迎えると、「なんだよ、文句あるのかよ」と不機嫌に言い放った。その翌週には、薄給にもかかわらず外国製の高価なバイクを購入してきた。金ぴかのバイクを見てM穂が眉をひそめると、健太はイライラして「オレが稼いだ金だろ」と大声で怒鳴った。それから数日のあいだは食事や睡眠もほとんどとらず、みるみるうちに痩せこけてきた。ただ二つの目だけは、爛々と輝いていた。

最後にM穂は、昨晚秘かにICレコーダーで録音したという健太の肉声を聞かせた。大声でまくしたてる健太の声が、小さなスピーカーから割れんばかりに響いてきた。

アイディアがマグマみたいに次から次へと湧きでてくるんだよ。まるで地球のエネルギーだね。地球といえば、温暖化。ホッキョクグマだ。

『寝てるか』って？ そんな無駄なことするわけないよ。だって、眠るってことは死んでるのと同じじゃあないか。『死は眠りにすぎぬ』っていうだろ。ハムレットの台詞だよ。知らないのかい、シェイクスピアのハムレットだよ。お前、教養ないねえ。オレは生きたいんだよ。一瞬たりとも無駄にしたくないんだよ。

だいたいね、俗物が多すぎるんだよ。日本は。日本といえば、少子化。これも結局はね、日本人がセックスしないからだよ。オレなんてね、性欲がみなぎって精力が体からこぼれ落ちそうだよ。

そうだ、いいこと思いついたぞ。ユーレカ。この溢れんばかりの精力をつかえば、日本の少子化に歯止めをかけれるんじゃないか？ 女は子どもを孕むと1年近くは使い物にならねえが、オレは1日何回でもOKだ。つまり生殖も並列処理が可能だな。オレのことを、生殖スパコンって呼んでくれ。やっぱりオレって天才だな。(甲高い歌声で) So lets start giving,,